

ペットとの暮らしは高齢者の健康寿命を延ばすか—影響要因と調整効果のペット種別比較

"The Impact of Pet Ownership on Healthy Aging: A Comparative Analysis of Influencing Factors and Moderating Effects by Pet Type

大阪経済法科大学大学院 経済学研究科 経営学専攻 毕世慧（深瀬 澄）

Osaka University of Economics and Law BISHIHUI (Kiyoshi FUKASE)

Keywords: Pet ownership, Elderly health, Subjective well-being,

1. はじめに

日本社会では急速な高齢化が進み、高齢者の健康寿命の延伸や生活の質 (QOL) の向上が重要な課題となっている。その一方で、核家族化や単身世帯の増加により、社会的孤立や孤独感の高まりが懸念されている。こうした状況の中で、ペットは単なる「癒し」の存在を超え、情緒的・社会的な支援源として注目を集めている。

しかし、ペット飼育が実際に高齢者の寿命や健康にどのような影響を及ぼすのか、また犬と猫でその効果に違いがあるのかについては、先行研究においても必ずしも一致した結論が得られていない。本研究では、ペットの存在が高齢者の健康や生活満足度に与える影響を多角的に検証し、その意義を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

先行研究では、高齢者とペットの関係が身体的・心理的・社会的健康に与える影響が検討されている。三島 (2018) の研究⁽¹⁾では、ペットの有無は高齢者の精神的健康や友人との交流に影響を及ぼす一方、IADL (Instrumental Activities of Daily Living)⁽²⁾や自立心には有意な影響は見られなかったことが報告されている。

犬の飼育そのものは身体的・精神的健康に直接影響を与えないが、犬への愛着度の強さは健康に影響することを示した杉田 (2009)⁽³⁾は日本におけるペットと人間の関係解明において価値のある研究である。

さらに、金児 (2020) では、伴侶動物から得られる支援が飼い主の主観的幸福感や生活の満足度に正の影響を与えることが示された⁽⁴⁾。特に、独居高齢者は同居家族がいる場合よりもペットからの支援を強く実感しており、ペットが社会的支援源として機能する可能性が示唆されている。

これらの先行研究から、高齢者の生活や健康においてペットの存在は単なる癒しにとどまらず、心理的支援や社会的交流を通じて間接的に健康や幸福感に寄与する可能性があることが示されている。

3. データ出典および分析対象者

本研究は 2017 年と 2018 年に大阪商業大学比較地域研究所と東京大学社会科学研究所が共同で実施した社会調査である「日本版 General Social Surveys (JGSS-2017, 2018)」のデータを 2 次利用した。サンプル数は 20 歳～89 歳までの 2 年合計で 2,660 だが、本研究では定年退職後の

55 歳以上の 1276 名を分析対象とした。
ペットの飼育状況は下表の通りである。

飼育なし	犬を飼育	猫を飼育	犬猫飼育	他の動物
916 人	192 人	104 人	22 人	42 人

4. パス解析

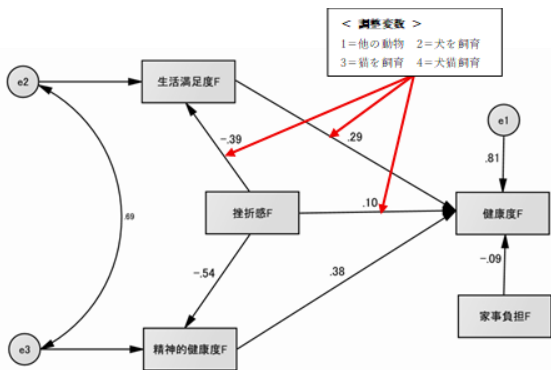
探索的因子分析により、Ⅰ.生活満足度、Ⅱ.精神的健康度、Ⅲ.健康状態、Ⅳ.挫折感について因子得点を測定し、欠損値が多いⅤ.家事負担は別に測定した。

図 1 探索的因子分析 (OLS, プロマックス回転)

項目	Factor1 生活満足度	Factor2 精神的健康度	Factor3 健康度	Factor4 挫折	共通性
生活満足度：家庭生活	.829	.080	-.091	.033	.690
生活満足度：余暇利用	.771	-.011	.031	.036	.588
生活満足度：居住地域	.765	-.161	.035	.033	.460
生活満足度：友人関係	.732	-.125	.106	.031	.492
生活満足度：家計状態	.565	.166	-.037	-.091	.501
生活満足度：全般的	.454	.393	-.044	-.052	.598
精神的健康：おちついた気分	-.055	.834	-.002	.115	.563
精神的健康：活力にあふれる	-.090	.651	.188	.019	.482
精神的健康：おちこんだ気分	.059	-.451	.014	.120	.227
幸福度	.265	.416	-.031	-.100	.435
生活満足度：健康状態	.164	-.065	.914	-.017	.947
健康状態（本人）	-.098	.138	.805	.001	.690
希望のなさ：将来の希望が持てない	.004	.035	-.014	.944	.864
希望のなさ：目標は達成できない	.044	-.017	-.001	.774	.589
因子寄与	4.547	3.991	2.915	2.413	

図 2 のパス解析モデルに因子得点 F を用いて健康状態への影響要因を分析し、さらにペット種別に標準化パス係数に対する調整効果を分析した。欠損値は処理せず完全情報最尤法(FIML)で推定した。

図 2 パス解析モデルによる調整効果分析



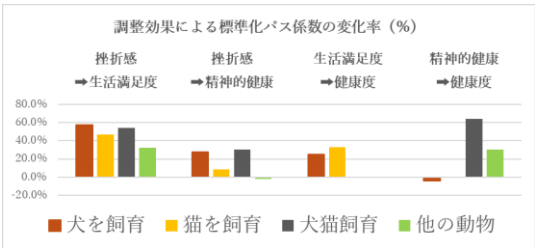
パス解析の結果、健康度（状態）への影響要因では、①精神的健康度(標準化パス係数.38)が最も強く、②これに次ぎ生活満足度(同.29)が強く影響している。③挫折感も直接効果(同.10)では正の影響を示したが、生活満足度(同-.39)、精神的健康度(同-.54)に負の影響を与え、これらの媒介変数を経由する間接効果としては、健康度に負の影響を与えている。④家事負担については弱い負の影響(同-.09)を示した。家事負担が重いほど健康度が低下する傾向が見られる。

5. 調整効果分析

4 種のペットを調整変数とする調整効果分析を行い、ペット種別に飼育なしのパス係数を基準とする変化率(相対比-1)を比較した結果、差異が見られた(図 3)。

①生活満足度を介した健康度への影響力は、犬または猫の飼育により向上し、②精神的健康による健康度への影響力は他の動物の飼育や特に犬猫の同時飼育により強く高められることが示唆された。しかし、③挫折感による健康度向上への直接効果はいずれも弱められ、他の動物のパス係数以外は有意とならなかった。④一方、挫折感による生活満足度と精神的健康への抑制効果が、それぞれ、全種、他の動物を除く全種で確認された。

図 3 飼育なしに対する標準化パス係数の変化率



6. 考察結果および今後の課題

ペットの飼育は、生活の満足度と精神的健康度による健康増進効果を強める。挫折感が強くてもそれを容認できる人は過度な努力を抑えるため健康が向上しやすいと考えられる。ペット飼育を調整変数とした本研究では、飼育が挫折による不満を強める原因となったが、因果関係としては、むしろ挫折によるストレス

(負のパス係数) が大きい人がペットに癒しを求めて飼うと解釈した方が自然かもしれない。この確認も含め、今後の課題として、ペット飼育の要因を傾向スコアより考察して4 種間の比較条件を揃え、るとともに、残差項 e1 に残された健康度への影響要因を解明して精緻化したい。

注

- (注 1) 三島富有他(2018)「ペット飼育の有無と高齢者の身体的・心理的・社会的健康の関連」老年学雑誌第 9 号
- (注 2) Lawton & Brody(1969)Assessment of older people: self-maintaining and instrumental activities of daily living, *Gerontologist*;9(3):179-86.
- (注 3) 杉田陽出(2003)「犬の飼育と犬に対する愛着度が飼主の身体的健康と精神的健康に及ぼす効果」JGSS 研究論文集[2]
- (注 4) 金児恵(2020)「コンパニオン・アニマルからのサポートが飼主の精神的健康に及ぼす影響」北海道武蔵女子短期大学紀要 第 52 号